

イチゴの Chilling 感応温度について

浅井 繁利・高尾 宗明

(福岡県立園芸試験場)

ASAI, S., and TAKAO, M.

On the Chilling Responsibility of the Strawberry.

北九州などの暖地では、半促成品種“ダナー”などの低温要求量の多い品種は、気象条件の相違により、生産が不安定な傾向を示し、主産地において重要問題となっているので、イチゴ品種の地域適応性や品種生態についてさらに詳細な基礎資料をうるため、昭和42年にChilling感応温度とその量的関係について検討した結果を報告する。

I. 材料および方法

“春香”、“八千代”、“ダナー”と休眠性の異なる三品種を用い、はちあげた苗を処理期まで15℃以上の温床に搬入した。処理温度は2℃、5℃、8℃および13℃、処理期間は50日(処理時間800h)、30日(480h)、20日(320h)、10日(160h)と標準区(no Chilling; 15℃以上に保温)とし、12月25日15℃以上に保温したハウスに定植した。

“春の香”はトンネル無加温栽培とした。

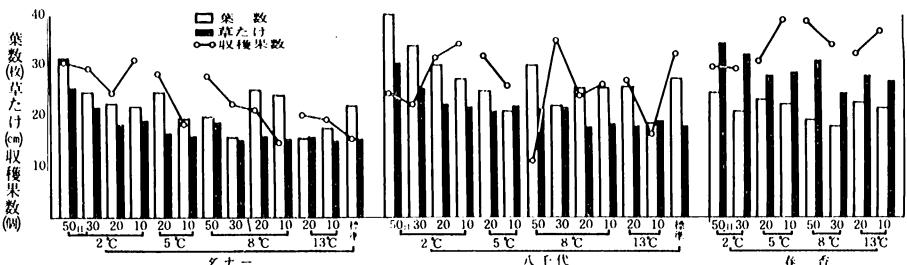
II. 成績および考察

(1) 株の生育は休眠の浅い“春香”、“八千代”は1月中旬と早く、休眠の深い“ダナー”は2月上旬から著しく、処理間では低温・長期間処理ほどおう盛な生育を示し、標準区がもっとも劣った。しかし“ダナー”では5℃10日、20日処理区、8℃は標準区と大差なく、13℃区は著しく劣り、総じて2℃30日以上処理区以外は十分な生育を示さなかった。“八千代”では2℃30日以上処理は過繁茂、8℃

20日以下と13℃処理区はロゼットとなり、“春香”では13℃10日処理でも十分に生育し、8℃50日、2℃30日以上処理は過繁茂の生育を示した。

(2) 収量は低温短日期の開花であるため着果がやや不良であったが、着花数と比例し、株の生育がロゼット化した標準区や低温不良区ほど低収の傾向を示し、“ダナー”では2℃30日以上処理区が多収を示し、5℃20日未満や8℃は減じた。このことから12月～1月の平均気温5℃前後の地帯が“ダナー”栽培の南限と思われる。“八千代”は2℃20日、5℃20日、8℃30日処理区が多収を示し、これより低温量が多い場合は着花数が減少し低収を示した。このことは、八千代が寒冬季や寒冷地栽培で収量があがらない原因と考えられる。“春香”では低温量が多い場合、収量がやや低下するようにみられるが、低温量の多少と着花数、収量の差が少なく、本邦における適応地帯が広い品種と思われる。

(3) 以上の結果からイチゴのChilling感応温度は品種間差があり、低温の程度と量的関係に対して株の生育は連続的の反応を示すと認められるが、“ダナー”では2～5℃、“八千代”では5～8℃、“春香”では10～13℃の各感応温度が適当と認めた。Chilling感応の限界温度については、“ダナー”“八千代”は8℃付近と考えられるが、“春香”についてはさらに検討を要する。



注) 葉数、草たけ ダナー、八千代は5月9日、春香は3月31日調査

低温量と葉数、草たけ、取穫果数